

茅野市総合教育会議 会議録

1. 日 時 平成27年7月1日(水) 開 会 午後 5時30分
閉 会 午後 7時00分

2. 会 場 茅野市役所 議会棟 大会議室

3. 出席者 市長 柳平千代一 教育委員長 吉田 一
同職務代理者 小平麻里子 教育委員 小林 智
教育委員 小林 俊恵 教育長 牛山 英彦

出席職員 生涯学習部長 木川 亮一 こども部長 牛山 洋治
学校教育課長 平出 信次 幼児教育課長 牛山津人志
生涯学習課長 小島 吉彦 企画課長 小池 徹
教育総務係長 渡辺 雄一
教育総務係主事 丸茂 直樹

4. 傍聴者 9名

学校教育課長

只今から、茅野市総合教育会議を開催します。
はじめに、市長から挨拶をお願いします。

市長

みなさんこんばんは。本日は茅野市総合教育会議ということでお集まりいただきありがとうございます。茅野市総合教育会議という仰々しい名前ではありますが、茅野市は日頃から教育委員の皆さんとざくばらんな話をさせていただいておりますので、改めてこのような場を設けなくても茅野市の教育や子育てについての意思の疎通は図られていると思っておりますが、こうした会議を設けることで総合的にまた大局的に茅野市の教育についての方向付けや関係づくりをしていければと思います。この会議を大事にしていきたいと思っておりますので、皆様におかれましては忌憚のない意見交換をお願いします。

学校教育課長

次に確認事項に移ります。

教育総務係長

確認事項1 (「総合教育会議運営要綱」説明)

市長

第4条の3、「会議において構成員の事務の調整が行われた事項については、」とありますが、構成員とは具体的にはどのようになりますか。

こども部長

ここで示す構成員とは、第3条「会議は、市長及び教育委員会をもって構成する」の教育委員会ということになります。

学校教育課長

他に質問等ありますか。

全出席者

なし。

学校教育課長

この確認事項は、了承されました。

ここからの座長は、市長をお願いします。

市長

分かりました。

本日の議事は大きく2つあります。一つが平成27年度教育方針について、2つ目が茅野市教育大綱の策定についてです。そのあと、以上の2つを含めた茅野市教育の現状について意見交換をします。

はじめに、議事1「平成27年度の教育方針について」、教育長をお願いします。

教育長

議事1「平成27年度の教育方針について」（資料説明）

市長

今の教育長の説明や日々の教育活動について、意見等があればお願いします。

吉田委員長

茅野市の教育について、学力ということがよく言われていますが学力についてもう一度見直す必要があると思います。学力というのは、学ぶ力であると思います。学ぶ力というのは一人一人の個人が生活するために必要な事柄を自ら獲得する力であると思います。テストの点数が取れる、取れないということではありません。そういう意味での学力ということを見ると、本来の学校教育だけではなく、すべての場において学ぶ力の獲得を目指さなくてはならないと思います。それをしっかりと獲得していくのが茅野市の教育の姿であると思います。そういう意味で、教育長の方針をしっかりと支えていかなくてはならないと思います。

小平職務代理者

21世紀を切り開くということが大事なのだと思います。本当に難しい時代になってきて、今日のニュースを見ている、どうしてそういう人間に育ってしまったのだろうと感じることがあります。色々な背景があって人間がつくられていくので、これからの21世紀をしっかりと見据えて困難を乗り越えていくことが出来る逞しさが必要だと思います。逞しさだけではなく、人間としての心豊かな面も必要だと思います。

小林智委員

子どもが学ぶペースに差があると思います。大人はそれぞれのペースで進んでも学んでいくことができますが、今の子どもたちは教え込まれる教育ではなくなっているのので学ぶペースが多種多様になってきています。学ぶペースも速くなってきていると思います。自分が子どもだった頃を思い返しますと、英語は中学から学びはじめました。今では小学校から英語活動が始まっています。大人たちは、昔はこうだったという概念は捨てて、もっと子どもたちのペースが速くなっているということ理解しながら子どもたちを育てていかなければならないと感じています。

小林俊恵委員

教育長の話の中に自己中心的という話がありましたが、今日は親の方が自己中心的で子どもたちを振り回している様に思います。子どもを取り巻く環境が変わっています。子どもがその環境とどういうふうに関わるのかを見極めることは、親の役目だと思います。親がもっと子どもに寄り添い、助言ができる親子関係を築くためには、親の教育も必要だと思います。親の都合で子どもが学べない環境が出来てしまうことは避けるべきですし、このような環境をつくり出しはいけないと思います。子どもの基本になっている、素直さはどこで崩れていくのか分かりません。親がしっかりと子どもを見る必要があると思います。

市長

小林智委員から、子どもも学ぶペースが速くなっているという話がありましたが、確かに昔に比べて速くなっています。

教育長

先日、泉野小学校でようこそ先生事業がありました。泉野小学校は全校生徒が80人という小規模な学校ですから、1年生から6年生までと一緒に活動を行っています。その道のプロの先生から、その道の生き方を学ぶという集会活動が行われました。私は驚きました。6年生の児童が先生以上に1年生から5年生までの先頭に立って、下級生に意見を促したり体験させていました。どうして泉野小学校の子どもたちが驚くような自己表現ができていたかと考えたときに、先ほど吉田委員長がおっしゃっていたように、先生たちが子どもたちに学ぶ力を教えているのではなく、子どもたちの学ぶ力をはぐくむという意味で引っ張り出していました。自ら学ぶ力を育てる学校教育をやろうとしている、或いは、やっていたから、あのような姿になっていたのではないかとつくづくと思われました。

各学校の校長先生が考えてやってくださっていることは、やはり同じ中学校区の地域の小学校でありながらも A 小学校と B 小学校では関係性がありませんでした。しかし、そういう関係では小学校中学校の学校教育はうまくいきません。小学校中学校が同じ気持ちや考え方でやっていくこと、これが小中一貫教育ということなのです。私が現役の教員だった頃では考えられなかった教育方法や考え方でやり始めてくれています。この方向を事務局は大いに支援・応援しなければならないとつくづく感じました。子どもが育っているということを感じました。

市長

自分の子どもの頃と比べたら、すごいなあと感じます。しかし良い子がどこかでおかしくなります。昔から便利すぎる世の中はダメだと思っています。これ以上便利な世の中は良くない。そうしないと自分で考えたり工夫したりすることに繋がっていかない。まさに 21 世紀を生き抜く力が大事だということは、これだけ IT 技術が進んで便利な時代だからこそ余計にしっかりと倫理観を持った人間を育てていかないと、戦争にしても原発についても取り返しのつかないことが起きてしまうと思います。便利を享受することは良いことだけれども、10 の便利さを享受したら 10 以上の倫理観を持った人間を育てていかなければ、知能は高いが道理のわからない人間ができてしまい、バランスの欠けた人間が育ってしまうと思います。ですから皆さんにおっしゃっていただいたことはよく分かります。具体的にどうやって取り組んでいくかということが大きなテーマです。かと言って不便な生活をさせようとする、キャンプ学習などはいいと思いますが、実際の社会の中では厳しい。勝ち残っていかなければならない訳ですし、頭の中で分かっているでもそう簡単には出来ないと思います。そういう想いもあって、私なりに縄文プロジェクトを立ち上げてきたというところがあります。茅野市では金沢とか泉野は比較的やりやすいと思います。フィールドそのものが環境ですから。

小林智委員

そうですね。言い方は悪いですが、隔離されていると言いますか、一つになりやすいかもしれませんね。

市長

今、総合戦略策定を進めています。その中で、郷土愛をどうやって持たせるか、都会に出ても茅野へ戻ってくる U ターンの子どもたちをどうやって育てていくかということを考えますと、やはり郷土愛を持たせなければなりません。郷土愛を持たせるためにはどうすればよいかを考えるのは、非常に難しいですが。

教育長

平成 21 年度から試行していた縄文科学習を、昨年度から本格的に実施しています。子どもたちはこの縄文科学習を通して、茅野市にはこんな素晴らしい文化があるんだと感じていると思います。教師が直接教えてはないのですが、「縄文人はこんな壺を作っていたけれ

ど自分たちではなかなかうまくできない。どうやって縄文人はこんな立派な壺を作ったのだろう、縄文人って凄い。」という意見が多く出てきました。このようなことを学ばせてもらうこの地に住んでいることは、本当にありがたいなと思ってくれていると思います。縄文科は、郷土愛にストレートに繋がっていると強く思います。

小平職務代理者

泉野小学校のようこそ先生事業で司会をしていた6年生が5年生だった時の研究授業を参観させていただきました。縄文の学習をしていくことを通して縄文に関する劇を創り出していくのですが、泉野の地域の皆さんにインタビューをして触れ合う中で泉野にはこういう自然があって素晴らしいということを多くの児童が気づき、自分たちを地域の自然や地域の人たちが育ててくれたという意見を言っていました。中には涙ながらに発言をする子どもたちもいました。心情面にも縄文科の学習が生きています。この子どもたちがその心を持ったまま育ててほしいと思います。故郷にもう一度戻ってくるような人間に育てられるのではないかなと思います。

小林俊恵委員

なるべく小さい頃からそうした気持ちを持たせるようにしていけば、その地域ごとの良さをどこかへ出て行っても忘れないと思います。下の学年の児童へ地域の良さをどんどん伝えていってもらいたいし、そのまま大きくなってもらいたい。縄文科は机の上では学べないことが学べる教科です。各地区でどれだけ地区の良いところを子どもたちに伝えていられるかだと思います。今がその時だと思います。

市長

それぞれの地区に色々な行事があります。どんど焼きは、大人の行事になっています。昔は櫓だけは大人の力を借りて、その他は子どもたちで全て作りました。子どもの行事なのだけれども、子どもが関わっていない行事もあります。大人がやったほうが断然速いということもありますが、その辺は少し見直す必要があると思います。

昨年度、宮川小学校の6年2組が縄文科で竪穴住居を作ったそうです。今年度になって長峰中学校に行った時に、「6年2組で竪穴住居を作りました」と言ってくれた生徒がいました。良い意味で自慢をしてくれました。あの達成感を味わえるということは良いことだと思います。

教育長

私たちが狙っていることを子どもたちは学び取っています。5・6年生にもなると、なぜ茅野市に縄文人が生活していたのかということをしちんと理解しています。自分たちが土器や縄文のビーナスを作る活動を通して、先生たちが教えた訳ではないのに我が故郷は良いところだと理解してくれています。縄文人の心を読んでいる学習をしている。やってよかったと思っています。

市長

次に議事2「茅野市教育大綱の策定について」、学校教育課長からお願いします。

学校教育課長

議事2「茅野市教育大綱の策定について」(資料2説明)

市長

現在、教育振興基本計画の策定を進めています。この基本計画を基に、教育大綱を位置付けていきたいと考えていますので、ご理解をいただきたいと思います。この大綱や教育振興基本計画の案について、何かご意見があればお願いします。

教育長

生きる力という言葉の意味は、非常に広範囲に理解しておかなければならない性格を持っている言葉だと思います。私はこの言葉を一言でいうのであれば、この荒波の世の中でも一人でも生きていかれるという意味であると思っています。今の時代、保護者によっては過保護で何でも手厚く手を差し伸べて面倒を見てくれているという状況下にあります。そうでなくても将来的に子どもが一人になっても生きていかれるという意味で、生きる力と捉えておくことが良いのではないかと思います。

吉田委員長

まさにそうだと思います。一人で生きていくということは、他者と繋がりながら生きていくということを当然含んでいます。自分を庇護する者がいるのではなく、一人一人の人間として繋がりながら生きていく為の力であり、それは想像力が欠如したらできてこないものです。想像力を育むということは、体で覚えた体験が大きいと思います。我々はそういうものを大事にしながら、学校教育という場であってもしっかりと経験させつつ体験化させていくものを大事に作り上げていくべきではないかと思います。この教育大綱はまだ言葉の面で直さなくてはならない箇所もあるかと思いますが、基本線はこれに基づきやっていただきたいと思います。

小平職務代理者

先日、新幹線の大きな事故がありました。男性の方がなぜあのようなかたちで命を落としたかを考えると、生きる力に関わってくると思います。年金の問題も原因の一つにあったそうですが、他人を巻き込んで亡くなったということを考えると、優しさの欠如といいますか、夢も希望も無くなってしまったから生きる希望も無くなったのだと思います。

市長

簡単には言えないと思いますが、逞しさがあれば立ち上がる勇気が湧いてきたのだと思いますし、優しさがあれば人を巻き込むことはなかったでしょう。

小林智委員

自立できるということが大事なのだと思いました。ヨーロッパの国では赤ちゃんが泣いていても放っておくそうです。日本ですと、泣けばすぐに抱っこしてあげます。ヨーロッパでは、赤ちゃんが泣いている理由は何なのかをまず考えるそうです。日本は過保護になりすぎている。ヨーロッパでは泣いていてもその場ではすぐに近寄らず、泣きやんだ後に様子を見に行くそうです。子どもの見守り方が日本と違う考え方だなと感じました。子どもたちは吸収する力がものすごくあります。大人から見るとペースが速いと感じているだけなのかもしれません。平成24年に金沢小学校でようそ先生事業がありました。東日本大震災の経験から、災害が起こった時にはどういうふうに避難をしたらいいのか講義してくださいました。その翌年に大雪災害が発生しました。交通が遮断され、2日間身動きが取れなくなりました。その時に、ようそ先生事業を受講した子どもたちが率先して活動してくれ、大人たちが子どもたちから学びました。大人が防災の必要性を改めて子どもたちから気づかされました。子どもたちはどんどん吸収していくので、こういう講義を受講する機会があると吸収しながら成長していくのかなと思いました。

小林俊恵委員

槻木の回り舞台を再現する取り組みは、泉野小学校の当時の5年生が4年生の時に地域の勉強をし、地域に回り舞台があったということ学んだことから始まったそうです。子どもたちが勉強したことによって地域の方々が協力して、一丸となって回り舞台が再現されました。縄文科を通して、縄文人は群れで協力しながら暮らすということ子どもたちは学びました。その学びが授業にもあらわれていて、グループで話し合う時でもなかなか意見が言えない児童と活発に発言をする児童がいますが、なかなか言えない児童に配慮をしていました。先生から何かを言われたわけでもなく、お互いに助け合っていました。教えた児童も教えてもらった児童も、お互いに満足していました。協力をする、優しい気持ちで人を見るということ子どもたちは学び取っています。

教育長

生きる力を育むということは、学校教育の現場においては非常に難しいと思っています。国語・算数・理科・社会という教科の勉強を学ばせることだけでも大変な上に、生きる力を育むということは難しい。1時間の授業の中でどのような授業をすれば生きる力を育むことができるかということまさに学校現場では考えなければなりません。生きる力は現行の学習指導要領でも、最終的には生きる力を育むということが言われています。しかし実際の授業を見れば、知的な学習を学ばせることに精一杯です。知的学習でさえ、うまくいかない状況もあります。先生が教えるのではなく、子どもたちがお互いに教え合う協力関係が生きる力の基礎になっていくのではないかと思います。そういう教育・授業をやらなければならないと思いました。

市長

グループでの活動は下手をするといじめへ繋がってしまう側面もあると思いますが。

教育長

そうかもしれません。しかし小林俊恵委員の話を知ると、いじめが起る雰囲気と教えてもらう時の雰囲気は全然違います。

市長

お互いに繋がり合う環境から、相互理解が自ずと生まれてくると思います。繋がり合う環境がないと、お節介になってしまいます。クラス全体に相互理解が生まれると、いじめは起らない。喧嘩をすることはあると思いますが、今のところ、いじめの報告は各学校からありませんか。

教育長

毎月各学校から報告がありますが、いじめの報告はありません。3年間くらいありません。先生の目が届いていないところがあると心配です。見えないところを見抜くところが教師力だよ、と私は常に言っています。心の内部は見えないけれど、見えないところを見抜ける教師になってくれるように校長先生にお願いしています。それが一番難しいところではあります。

市長

見えるのは喧嘩。喧嘩は後で仲直りさせればいい。いじめは見えない。

吉田委員長

いじめは学校だけでは終わらないと思います。地域の親たちの人間観から始まり、色々な状況の中にあり、それだけになかなか見つけにくいのだと思います。今、教育長がいじめはないとおっしゃいましたが、本当はないと判断していいのかなと思います。常に我々は気にしておく必要があります。気にしつついるという姿勢を先生方も持っていてくれていると思いますし、それがあつ限りは大事にならずに済むのではないかと思っています。それがなくなった時に、非常に危険な状態になってしまうのではないのでしょうか。学校という組織自体がある意味いじめを引き起こしやすい一つのシステムを持っているという意識を常々持っているべきだと思います。学校という仕組み自体がいじめが起る宿命みたいなものを持っているような気さえます。これが正しい認識なのかは分かりませんが。それだけに余計に、学校に関わる人間たちがいじめを起ささないという意識を常に持っていなければいけないと思います。

市長

私の経験ですが、大人の世界にだつていじめはあると思います。

小平職務代理者

あると思います。ママ友同士や会社内の人間関係など、子ども以上にあると思います。そういうのが子ども社会に移っていくのかなと思います。

市長

学級の保護者同士の仲が良ければ、子ども同士がけんかをすることもあると思いますが、いじめはないだろうと思っています。親同士に悪い関係がなければ子どもはいじめをしないと思います。

小平職務代理者

学校の雰囲気づくりに関して、小規模校は比較的やり易いと思いますが、小学校はとかく学級王国になりやすいです。職員室に集まれば、あの子は元気がなかったけれどどうしたのだろうか、こんな感じで廊下にいたのだけれど大丈夫かな、と気楽に話せるような雰囲気をつくるのが子ども同士のいじめの根が見えないところを見抜く力にもなると思います。そういう雰囲気を校長先生や教頭先生がリードをとってつくってほしいと思います。大きい規模の学校は大変だとは思いますが、垣根を越えてほしいと思います。そういう雰囲気をつくるのが、いじめゼロになると思います。

教育長

いじめと不登校は関係があると思っていましたが、いじめが原因で不登校であるという子どもは、茅野市にはほとんどいません。不登校の原因を見つけてきましたが、それは4・5年前まではわかりませんでした。けれども、3年くらい前から薄々感じていることは、家族内での人間関係を不登校の子どもたちは圧力として感じているようです。こういうケースが多いです。親育ちと言いますか、人間関係づくりは家庭の中においても重要なのだと思います。家庭内の人間関係づくりについても、学校教育が何らかアクションを起こさないといけないかなと思います。どうアクションを起こしたらいいのか、まだわかりませんが。

市長

家庭という一番基本的な単位がしっかりとしていなければ、その先の関係をつくることは難しい。そのためにもスクールソーシャルワーカーの役目が大切になると思います。

本日は、様々な貴重な意見をいただきました。次回も積極的な発言をお願いいたします。以上で議事を終了します。

学校教育課長

ありがとうございました。次回は秋頃の開催を予定しています。

以上をもちまして、茅野市総合教育会議を閉会します。